

T 雄の成長 (一)

浜 田 駒 子

幼稚園に入園するまで—T雄の記録 幼児の教育60巻4号、入園前の子どもの一日 60巻5号
T雄の入園—母親の記録より 60巻6号、T雄の記録(幼稚園に入園して) 60巻7号、T雄君
の幼稚園生活(幼稚園入園後一月半) 60巻8号、一学期を過ぎて(T雄の記録より) 60巻10号、
夏を終わって(T雄の記録)(60巻10号に幼稚園時代のこと詳しくのっている)

T雄の幼稚園の記録をこの雑誌にのせていただいたのは、今からちょうど八年前であった。

そのころ四歳だったT雄も、この四月から中学生だ。
この八年間でT雄の環境はいろいろ変わった。その中でもおもしろものをひろうと次の三つである。

一、弟がふえたこと。

二、前回の時は、田園調布に住んでいたが、大阪、町田市と移り住み、今は神奈川県もはずれの相模原市に、のんびりと住んでいること。

三、父が、二年前にサラリーマンをやめて独立し、事業をはじめたこと。

幼児の間は、その毎日の行動を観察し、写しとれば、その子のほとんどを知ることができたが、十二歳ともなると、内面的なもの——物の考え方、感じ方——もあり、生活のすべてが影響しているのに表に出てこなかったりするので、簡単にはいかない。

そこで、兄弟、親、学校、友だち、スポーツ、趣味などに項目を分け、記してみることにする。

一、兄弟

妹とみ子の下に弟たくが生まれた。

T雄と、とみ子は三歳二か月ちがい、とみ子とたくは四歳十か

月ちがう。

・…母は三人をどう扱っているか。

T雄は話し相手にちよどいいい。

洒落も通じるし、話にすぐ乗って来るので話していても気持がいい。T雄もまた話し好きだ。

私も熱しやすいで、T雄の話にふんがいたり、大声で笑ったり、「その人は、こういう気持ではなかったかしら」と話の主人公の代りに弁解したりする。

T雄が学校へ行っている間のとみ子やたくのおもしろい話をしやると、「本当におもしろくてかわいくて仕方がない」というようにクックと笑いながらきいてくれる。

妹のとみ子はそうはいかない。おもしろい話をして「……それでおしまい？」と真剣な顔できくので、がっかりしてしまう。

末っ子のたくは、いつも、いつのまにか私のひぎに来てすわっている。

また、絵本を読んで持って来る。

とみ子が不平をいい出した。

「おかあちゃまは、いつでもたくばかり可愛がっている。あたしは、抱っこしてもらったことがない。本も読んでくださらない」

「あなたがたくくらの時は抱っこしてあげたのよ」と、
いっても、自分の記憶にないから、信用しない。

「本だって小学校三年生ですもの、自分で読めるでしょ」と、
いってもきかなかった。

そんなある日、心理学専攻の友人にあった。

「お宅は、男、女、男の順だから、男だけの兄弟三人、女だけの姉妹三人、よりも扱いやすいのではないかしら。真中の女の子だけ特別に扱っても、おかあさんと同じ女の子だからというので、お兄さん、弟さんが嫉妬心をおこさずにすむから」と、いわれて目が開かれるような気がした。

それから、何でもとみ子とおかあさんは一しよと心がけ、兄と弟に、「とみ子はおかあさんと同じ女の子だから、やさしくしてあげてね」と、いつている。

あれ以来、すぐ口をとんがらがせて、T雄に、「カッパのとみじろう」とからかわれることもなくなった。

「本を読んでください」とくれば、読点まで一行ずつとみ子と交代に声を出して読んであげる。

「編物をしたい」と、いうので、一番簡単なマフラーを教えているし、刺しゅうが好きなので、母が且念にためた刺しゅう糸をそっくり箱ごとあげた。

今では、母がとみ子の本をとみ子と交代で読んでいると、いつ

のまにかたくが母のひぎに来て、それにきき入っている。T雄は本を読んでいて、時々、「あのねえおかあさん」と話しかける。と、というのが、平均的な家庭の生活だ。

母が、三人の子を平等に扱っていると思っけていても平等ではないらしい。

真中の子は、どうしても独立独歩で良い面が育つが、それだけに母は安心しておろそかにしがちである。真中の子に努めて目をかけるように心がけるのが、三人の子を平等に扱うということだろうと思っけている。

・…T雄は妹、弟をどう扱っけているか。

T雄とたくはケンカをしない。

たくと、とみ子はすぐケンカする。

たくが、おとなしく何かしているるとみ子の頭をちょいっつとつくことからケンカがはじまる。

「何よォ」と、つつきかえず。

はじめはふぎげているが、だんだんさきわぎが大きくなっけていく。家の中をバタバタ鬼ごっこをするか、一つになっけてコロコロころげている。

とみ子が笑いなからからかうので、たくは全力をあげてつつかかっている。

父がいる時は、父が「しずかにしなさい」と、いえば、ピタリと二人とも静かになる。

あるいは、T雄が、大抵本を読んでいるので、「しずかにしろ、とみ子」という。この時、たくとはいわずに必ず、「とみ子」とつけるのである。

すると、こんどは、「あたしばかり悪くいうのよ。たくが先にやったのに」と、T雄につっかかり、T雄ととみ子のケンカになる。結局、とみ子が泣いておしまいである。

とみ子のしていることを母が、「やめなさい」と一回いっけて、やめるだろうと間を置っけているのに、T雄がそばから、「やめろ、やめろ、やめろっけていわれただろ」と、せつづく。

「いま、やめるところなのに」と怒る。そして泣く。

あるいは、母がとみ子に注意しているると、「そうだよ」と突然脇から口を出す。

折角、素直にきいているのに、「お兄ちゃんは関係ないのに」と、泣き出す。

「おかあさんが注意している時は、口出ししてはいけなさいといっけての忘れちゃだめですよ。少し神経過敏になっけているから、あんまり泣かさなさいでね。とみ子がやさしい子になるか、ひがみっけてい子になるかは、おかあさんとT雄の接し方にかかっているのよ。とみ子が、いやな女の人に育っけてしまったら、T雄だっけてい

やでしょ。毎日、毎日のことが積み重なって人格ができていくんだから、一日でもおろそかにしちゃだめなのよ」と注意すると、「ハイ」と、神妙に返事をする。

それからしばらくは、とみ子は平和である。

また、そういうとみ子を見るのがT雄も好きで、「ピアノひいている時と、本を読んでいる時、あみものをしている時のとみ子は『可愛いな』と思うんだけど」と、いう。

孫引きで申しわけないが、「子ども部屋」という雑誌に次の実験がのっていた。

「二人兄弟のグループ、三人兄弟のグループを用意し、いちごを四つずつのせた皿を、それぞれの兄弟の前に置いた。おかあさんに外へ出てもらってしばらくして入ってもらうと、同数に分けられる二人兄弟の方は手をつけずにいて、同数に分けにくい、三人兄弟の前の皿はどれも空になっていた。これは一様に長子がまんな中の子どもを説得して末っ子に二つたべさせたからであった」

母は、これを家の子にためしてみた。

T雄は、即座に、「あまった一つはたくにやる」

とみ子は、「まず一つずつわけて、あまった一つは、三つに分ける」

「いちごですもの、小さくて三人では分けられないわよ」

「じゃあ、おかあちゃんにあげる」

兄や、弟にあげるといふ考えは出てこない。

とみ子やたくが母にぞんざいな口をきくと、叱るのはT雄だ。

「なんだそのいい方は」という。

そのくせ自分の妹や弟への言葉づかいは乱暴だ。

二言目には「ぶっとばすぞォ」という。

おこづかいで、ベートーベンの『運命』のレコードを買って来て、大事にきいている。

そして、相かわらず二人がつついた、つかないで室の中でバタバタしているのを見て、「これに気をつけろ、これをこわした奴は、ぶっとばして、ぶっころすぞ」というので母に、「冗談でも殺すなどとはいけない。いくら大事なレコードでも人の命とどっちが大切か考えてみなさい」と、たしなめられた。

言葉の乱暴なのは、自分でも承知しているらしい。

前回の記録を読んで、

「小さい頃は、ぼくていねいな言葉を使っていたんだね。今は考えられないよ。自分でいうのおかしいけど、小公子みたいな言葉使っていたんだな——」と、喜んでいたら。

三年の時から、十数回は読んでポロポロになってしまった『小公子』の言葉づかいに似ていて、よほど嬉しかったのだろう。

たくに対して、気合いを入れるのはいつしかT雄の役になって
いる。

「あんなにT雄にはきびしかった父も、たくにはやさしい。

「たく、それはいけなかったでしょ」と、にこにこしている。

私もまた、同じようである、何かしたくないとタダをこねられ
てもあわてなくなった。

「アッソウ。あなたは、それをしたくないのね。でも、それが
できるのがいい子。たくちゃんももう、それができるとおかさ
んは思っているんだけどできないならいいわ」

後は、ほうっておくと「いい子になった」と、やって来る。

母は、三人目でやっと、子どもは一度でわからないから、くり
返しくり返し教えればいいし、語気荒く叱らなくても、子どもは
理解するというのを身につけた。

理論は知っていても、最初はそうはいかなかった。しかし不思
議にT雄を注意する時は、母自身非常に腹がたつ。語気荒くすま
いと思ってもフッフツと怒りが出て来る。

とみ子や、たくにはそういうことはない。

どうしてだろう。

たくに至っては、悪いことをすると、腹がたつどころか、可愛
くて仕方がないのだから我ながら、困っている。

父と母がソフトになったので、たくが、たくまじきに欠けては

大変。たくも男だから、たまにはお兄さんに、

「男だろ、泣くな、しっかりしろ」と、どなってもらうのもし
いと思っている。

朝、たくが汚ない手を洗わずに食事をするのでタダをこねてい
た。

私は「ダメよ」とひとこといっただけで、後は知らん顔をして
朝食の仕度をする。

もう四歳だから洗えないわけではない。洗面所の前にすわりこん
でいるので、T雄が通りかかる。

「たく、手を洗え」

やさしくいう。字にかくと乱暴のようだが、本当はやさしいい
方。

まだ、洗わない。

「たく、手を洗わなければ、兄たんがお尻バチバチするぞ」

たくが二歳の頃、サ行がいえなくて、兄たんといっ
た。たくがもうお兄ちゃんとかお兄さんといえるよ
うになったのに、T雄は自分のことをたくにいう時
は、無意識に「兄たん」といっている。ここにT雄の
とみ子に対する気持とちがった、小さい者に対する気
持が現われていると思う。

まだ洗わない。

「お尻バチバチはしないよ。洗おうな」と、T雄が譲歩してくれたのに、

たく「洗えばいいんでしょ、洗えば」と、いったからたまりません。

「そんないい方があるか。これでは、お尻を叩かずにはいられない、そういういい方が一番いけないんだ」と、十ぐらいお尻を叩かれてしまった。

私が、ふだん、仕事をしているので、たくの面倒を頼むことがしばしばある。

たくを自転車の後にのせて床屋へつれて行く。歩いて行ける近くの床屋でもいいのだが、遠いところで、五十円やすく、ガムをおまけにくれるし、マンガの本がいっぱい置いてあるので、そこまでわざわざ行くのである。また、週に一度、母が高校へ行くので留守をする。手伝いのおばさんが帰ってから二、三時間の間、とみ子、たくをみている。

先日、母の高校のクラス会があった。年に一度のことだし、行きたかった。T雄ととみ子はいいいとてくれたが、たくの答が心配だった。

「たくが何ていうかしら」と、母がつぶやくと、T雄がたくを抱いて話をしはじめた。

「たくは毎日、友だちと遊ぶでしょう。だれがいるの、○○ちゃん、○○ちゃん。おかあさんもね、小さい時、たくが今遊んでいるような友だちがいたんだよ。その人たちが大きくなって、きょう、合うんだってさ。行かしてあげようよ。たくだって、友だちにずーっと合わなかったら合いたいでしょう。行かしてあげようよ」

× × ×

「兄さんがいたらいいなあ——」と、T雄はいう。

「あなたはいじめられたことがないから、そんなこといってられるのよ。とみ子をみなさい。あなたにいじめられるじゃないの、かわいそうに。」

お兄さんは他人じゃないから、遠慮なく平気で叩くし、叩きかえしたくても、兄さんの方が大きくて、かないっこなくて結局泣くよ。長男で、いばってられていいじゃないの」

しかし、一度でいいから、いじめられてみたいそうである。

(つづく)

× × ×